

聖書:列王記第二 2章19~25節

説教:信仰によって

はじめに

預言者エリヤの弟子となったエリシャは、先生に追いつこうと頑張るあまり、あるときエリヤにこんなお願いをします。「先生。あなたの霊を私に相続として与えてください。」ひとこと言えば「死んでください」と言ったのと同じ。それからどうなったか。エリヤが竜巻に乗って天に上げられ、神の御臨在に触れたとき、自分がとんでもないことを願ったという罪に心を刺されて、衣を引き裂くほど悲しみます。ところが、落胆しながらヨルダン川の水を打つと水が両側に分かれるのです。エリシャは自分の罪が赦され、ここから自分は預言者として出発することを知ります。これが前回までのあらすじでした。

それに続く今日の箇所。エリシャをからかった子どもたちが、熊に襲われて死んでしまう。これをどう考えたらよいのでしょうか。最近、ある宗教団体のことが問題になっていますが、キリスト教も恐ろしいところではないか。そんなふうに思われたかもしれない。神はどのような方なのか。ともに考えてまいります。

1 二つの町

1) エリヤ：ベテルからエリコへ

今日のところには二つの町の名前が出て来ます。19節の「この町の人々」、これはエリコのことです。二つ目が23節にあるベテルと呼ばれる町。なぜこの二つの町が出てくるのか、理由がある。

2章の前半をもう一度おさらいします。まだエリヤが竜巻に上げられる前のことです。エリヤが最初にベテルに向かったとき、そこに住んでいた預言者たちがこう言いました。「今日、主があなたの主人をあなたから取り上げることを知っていますか。」エリシャはこう答える。「私も知っていますが、黙っていてください。」

次にエリヤはエリコに向かうのですが、エリコに住んでいた預言者たちもベテルの人たちと同じことをエリシャに告げ、エリシャも同じように答えた。そんなやりとりがあつてから、エリヤとエリシャはヨルダン川にやって来て、エリヤが竜巻に乗って上げられていく。そういう順番でした。

2) エリシャ：エリコからベテルへ

そのことを押さえてから今日の箇所を見ます。エリシャがヨルダン川を渡って最初にやって来たのがエリコで、その次がベテル。先ほどのエリヤと比べてください。順番として今来た道を引き返していることにお気づきでしょうか。エリコとベテル、そこに住んでいた人たちの信仰を比べて観察しなさいということです。では、どこが同じで、どこが異なっていたのでしょうか。

2 応答の違い

1) エリヤが来たとき

まずエリコの町から見ます。六年前、イスラエルに行かせていただいたとき、このエリコにも行ってきました。イスラエルはほとんど乾燥地帯なのですが、エリコだけ豊富な水が湧き出る泉があつて、なつめやしの木が生い茂り、人が沢山住んでいる。世界で最も古い町と言われているのもうなずけます。ところがエリシャの時代、一つだけ問題があつた。19節。「あなた様もご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産を引き起こします。」そこでエリシャは、持ってこさせた塩を水の源に投げ込み、こう言います。21節。「主はこう言われる。『わたしはこの水を癒やした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』」それで水が良くなった。

ここで考えます。なぜ人々はエリシャにお願いしたのでしょう。エリヤはつい最近エリコに来ていたのです。そのときお願いすればよかつたはずですが、ところが、今頃になってエリシャにお願いする。おかしいですね。

エリヤがやって来たとき、エリコの預言者たちが言ったことばに注目します。5節。「今日、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャひとり残されることになるのを気遣い、心配して言ったのではありません。その反対で、エリヤを疑っているのです。エリヤは、主からいのちを取られるほど悪い預言者に違いない。そんな先生に従っているエリシャ、あなた大丈夫ですか。そんな意味です。

2) 真の預言者を認める (7, 15節)

それが、いまなぜエリシャに水のことを相談するのか。何かあつたからです。7節前半を読みま

す。「一方、預言者の仲間たちのうち五十人は、行って遠く離れて立った。」

エリヤとエリシャがヨルダン川に向かおうとしたとき、エリコの預言者は二人の跡をつける。もしかして、エリヤがどんなふうの主からさばきを受けるのか見てやろう。そんな好奇心からだったかもしれない。ところが彼らが見たのは、竜巻に乗って上げられるエリヤと、ヨルダン川の水を打って両側に分けるエリシャでした。それでどうなったか。15節。「エリコの預言者の仲間たちは、遠くから彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言って、彼を迎えに行き、地にひれ伏して礼をした。」

神から遣わされた預言者を疑っていたことを悔い、罪を告白します。こうして疑い深かったエリコの人々は神を信じ、エリシャに水の相談をしたという流れになります。

3) ベテルの人々の不信仰

ではベテルの人々はどうだったのでしょうか。エリヤとエリシャが町に来たとき、エリコの人たちとまったく同じことを語っていました。「今日、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」

先ほども言ったように、二人のことを疑っています。そこまではエリコの人たちと同じ。では、その後どうなったか。ベテルとエリコは18Kmほどの距離です。エリヤが竜巻に乗って天に上げられたことや、そのなきがらを探したけれど見つからなかったこと、エリシャがヨルダン川の水を両側に分けたこと、エリコの人たちが悔い改め、水が癒やされこと。それらのことは当然のことですが、すでに聞いていたはずです。聞いていたけれど、彼らは心を頑なにしてなにも信じようとしなかった。

そんなベテルにエリシャが来たときのことで。23節。「エリシャはそこからベテルへ上って行った。彼が道を上って行くと、その町から小さい子どもたちが出て来て彼をからかい、『上って来い、はげ頭。上って来い、はげ頭』と言った。」

今風に言えば、身体的特徴をとらえて人をからかってはならないと教えられていますから、子どもたちのしたことは褒められたことではない。しかし、だからと言って熊に食べられるように仕向けるのは、あまりにも行き過ぎではないか。そもそも、子どもにからかわれたくらいで腹を立てるとは人間として器が小さすぎる。そんな疑問さえ湧いてきます。まず最初に断っておきますが、エリシャは神に打ち砕かれ、誇るものは何もないと自覚し

ていますから、こんなことで腹は立てる人ではありません。

では子どもたちのなになが問題であったのか。無邪気に遊んでいるわけではありません。大人たちが神の預言者を信じようとしなかったその不信仰な態度が子どもたちに大きな影響を与え、それでエリシャをからかった。ここはあくまでも信仰の問題として見なければなりません。とは言っても、ここで起きていることをすぐには納得できません。

3 信仰

1) 倒れている者に駆け寄る神

そこで視点を変えて考えます。神はどのような方なのでしょう。イエスが語ってくださった一つのたとえ話を紹介します。道にある人が意識不明で倒れていました。そこを身分の高い祭司と呼ばれる人や宮に仕えているレビ人と呼ばれる人たちが通りかかるのですが、問題に関わることを恐れて見て見ぬふりをして足早に去って行きます。ところが当時人々から差別されていたサマリア人がそこを通りかかると、倒れている人のところに駆け寄り、一生懸命介抱し、宿屋に連れて行って主人に治療費を出すから助けて欲しいと依頼する。神はこのサマリア人のように、愛に満ちている方なのだと教えます。

2) しるしを見て信じる

ああそうか、誰でも救ってくださるのかと思うかもしれませんが、一つだけここに条件があります。たとえば、家族から「病院に行った方がよい」と言われたけれど、自分は病院には行こうとしない。それで家族と口論になることがあります。救いもこれと同じです。自分で救われなければならないと自覚する人は、神の所に行って救われる。しかし、病気の自覚のない人は神の所に行こうとしません。神は力ずくなことはしません。自分は病人なのだとして自覚し、自分から救われることを願うまで待ちます。

でも、ただ待つわけではありません。私たちが信じる事ができるように、さまざまなしるしを見せてくださる。エリコの人たちで言うなら、エリヤが竜巻に乗って上げられたことや、エリシャが罪赦されたとき川の水が二つに分かれたこと。そして人々を苦しめていた水が癒やされる、そのような奇跡を見せて、救われるようにと促してくださる。実際そうやってエリコの人たちは救われました。ところが、ベテルの人々は頑なに心を閉ざしたまま、信じようとしなかった。

3) 神のひとり子イエス・キリストの死と復活

では、私たちはなにを見て信じるのでしょうか。イエスは言われました。マタイ12章39節。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。」ヨナのしるしとは、イエス・キリストの死と復活を指します。十字架で死なれ、三日目によみがえられた方。あの方を見て信じなさいと言われていました。そうすると、神は私たちを救うためになにをされたことになるのか。神のひとり子である方が、私たちを救うためにいのちを捨てたということになる。いったい誰が、神のひとり子を十字架にかけて殺したのでしょうか。私以外の誰かですか。二千年前のどこかの国の人たちですか。いいえ、私です。私たちです。そういうことをしておきながら、子どもたちをこんな目にあわせるなんて神はひどい方だと言う資格があるのでしょうか。むしろ、神は論してくださっているのではないのでしょうか。あなたがこのまま、神が折角延ばしてくださっている救いの御手をどこまでも払いのけるならば、その行く末がどうなっていくのか、よく考えなさい。

神は残酷だと言う前に、神の子を十字架につるした罪さえも赦してくださる神に感謝したいと思います。